

---

# なるようになれ\*ミラクル\*

ZARUSOBA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なるようになれ\*ミラクル\*

### 【Nコード】

N7003D

### 【作者名】

ZARUSOBA

### 【あらすじ】

「なるようになれ」から一年……えっ？なるようになれて何ですかって？……えっと、一応この小説は続編なのです（涙）興味のある方は読んでみてください。極々平穩に暮らす主人公「鈴木修」ところがどいう理屈か再び異世界へ呼び出される。そしてそこで見たものは小さな少女の姿だった。

## 第一話 「承認」(前書き)

この小説は一応続編です。

えっ？ 前作知らない？ でも大丈夫。

そんな人でも大丈夫なように一応作っています。

でも前作読んでから読んで頂けるとより一層美味しく読んでいただけます。

どれくらい美味しいかというと、冷ご飯にふりかけかけたぐらい美味しくいただけます！

## 第一話 「承認」

ここはある星。名を「アリシユレード」

この世界では魔族と人間が暮らしており、それだけでも変わっているが

特に変わったことがある。

『魔王』の存在だ。

なにかとやんちゃな魔族達を取り仕切るには魔王という存在が必要不可欠。

そしてこの時期、新たな魔王が誕生する。

暗い部屋の一室。

電気代を節約するためか、電気をつけずに机の上に置いてある紙を見つめる

少女の姿があった。

「やっぱり、こいつで決定かなー」

あーあ、と仕方なさそうにその紙に貼ってある写真を眺める。

一人の男性。見た目は至ってごく普通の男だった。

少女は机の片隅に置いてあった太鼓判を手取る。

そして、紙めがけて思いつきその判を叩きつけた。

少女は自分の押した判に満足がいったのか、口元が大きく三日月を作る。

「アンタに採用！ 名誉ある百二十八代魔王の名は”鈴木 修！”」

時期は春。

出会いがあり、そして別れがあるこの季節。予期せぬ出会いが訪れる事を

俺は密かに心待ちにしていた。

今年こそは春爛漫、甘い学園ライフを過ごしてやると決意していた俺、「鈴木 修」は高校二年生になった。

今日は初登校日。俺は自分の教室へと向かい、廊下に張り出されていた

クラス表を目にすると。

「よう！ 今年もヨロシクな。修」

俺がクラス表を見る前に一緒だということが分かってしまった男が一人。

俺はこの男の事をよく知っている。  
小学校からの腐れ縁の「山本 和志」  
自称サッカー部のエース。

「なんだよ、またお前と一緒にかよ……」

「そう嬉しそうな顔するなよ兄弟」

「いや、嬉しくないって」

そうして何時ものように漫才のような挨拶を交わし、教室へと入っていく。

中は賑やかな事この上ない。

目の前の黒板には誰が何処に座るのか書かれていた。

俺と一志も所定の席へと座る。

そして遊びの時間から仕事の時間へと切り替わる鐘が教室に鳴り響く。

教室の中に担任が入ってくる。

頭はソフトクリームのような巻き髪に、二等辺三角形の眼鏡とユニークな女担任。

「えー、今日から私がこの教室の担任になった”山田 真希”ザマス。」

皆さんヨロシクお願いしますザマス」

そう担任が言うと、皆から心のこもってない拍手が送られる。

ぱち、ぱちと何処か投げやり。

しかし担任はさほど気にした様子は無く、構わず明日からの日程を俺達に告げる。

二年になったからには……などと一人演説を繰り広げるソフトクリーム。

そして最後に。

「皆さん、二年になったからには就職か進学かはつきり決めておくザマス。」

今からプリント渡しますから将来、何になりたいか希望を書いておいてザマス」

担任は席の一番前の奴にプリントを渡し、前から後ろへと順々に配られていく。

俺は手元に来たプリントに目を通すと、第一志望、第二志望、などと書かれていた。

（将来……か）

ふと頭をよぎったのが懐かしいあの頃。

異世界に呼ばれ、自分の夢が叶ったあの頃の思いで。感傷に浸った為か、無性に会いたくなってきた。

俺は思わず第一志望にアリシユレードと書いていた。

無論、その後担任に呼び出されて「頭は大丈夫ザマスか？」などと言われたのは言うまでもない。

学校初日が終り、いつもどおり帰ろうと下駄箱を開けてみると、中には

一枚の手紙が入っていた。

これって……もしかして！俺は焦る気持ちを抑えつつ、中身を確認する。

「何々……これは不幸の手紙です。この文面と一緒に物を十人に出さないと

不幸が貴方に襲いかか……」

破り捨てた。

もう思いっきり音を立てながら。

俺は不愉快な気持ちで学校を後にする。

「ただいまー」

自宅の玄関のドアを開け、真っ先に向かうは二階にある自分の部屋。ドタドタと階段を上り、ポイポイっと学生服を脱ぐ。

俺は私服に着替え、一階の台所へと向かう。

今日は平日の為両親は働きに出ている。

棚にあるカップ麺を手に取り湯を注ぐ。

「いったきまーす」

そうして食べようとした時。

突如足元から虹色の光があふれ出す。それは円を描き、幾何学的な文字が

浮かび上がる。

” ジュゲムジュゲムゴコウノスリキレ……ごによごによ ”

何処からとも無く声が聞こえてくる。……ごによごによって、おい。声からして女の子のようだが、姿が見えない。呪文のような言葉は更に続く。

” 我、幾ばくの時を越え、真理を結び、門を繋ぎて鍵を解く！ ”

「おい！ さっきの幼稚な呪文から続く言葉とは思えないぞ、それ！」

俺の言葉も虚しく、光は俺を包み込み、辺りが真っ白になる。  
あまりの眩しさに目を閉じる。

それが数分続き、やがて光がおさまる。  
奪われた視力が少しずつ回復していき、そして視界が開かれるとそこは自分の家ではなく、何処かの城と思われる室内が現れていた。俺はあまりに突然の出来事にキョロキョロと見渡していると。

「お前が鈴木か？」

可愛らしくも高い声色がする方を向くと、目の前に手すりに肘をつ



いて足を組んで玉座に  
ふんぞり返る少女がいた。

柔らかい桃色のツインテールに若干鋭い眼つき。口はニヤリと笑い、  
少し尖った差し歯が見える。

服は黒の光沢ある衣装で、子供にはあまり似合わない衣装。

そして一番目を引くものは……しつぽ。先つぽがトランプのスペードのように

なっており、それがフリフリと動く。

「よく来たな！ 人間の分際で」

「いや、勝手につれてこられたのですが？」

「ムッ、そうだった」

アハハハと目の前の少女は豪快に笑う。  
少し気になる言葉が。

「待った、今人間の分際って言わなかった？」

「ああ、言った」

「じゃあ、君は人間じゃないのか？」

「おう。私は魔族だ」

「魔族……!!」

その言葉を聞くやいなや途端に背筋が凍る。

なにせあまりいい思い出が無いからだ。

俺は心の中で間違いであってくれと思いながら質問する。

「あの、ここはどこなのかな？」

「ん？ ここか？ ここはアリシュレード。お前の居るところとは  
別の異世界だ」

ある程度予想はしていたが、実際に告げられると精神的にまいる。ハハッ、そうか。俺また帰ってきたんだ。嬉しさ半分、悲しさ半分。

そつえばどうして俺は呼ばれたんだろ？

「あの、俺を呼んだのは君なのか？」

「おう。いやー、しかし、お前がスズキか……なんかガツカリ」

「えっ？ どうして？」

「うむ、うちのジジイが何時も口癖で言っていた奴がこんな平凡の人間だとはなー」

「じ、ジジイ？」

ジジイと言う言葉を聞いて頭に思い浮かぶものは一人。

以前俺をこの世界に呼び出したというはた迷惑な爺さんがいたな。もしかして……。

「君、モンタ議長の血縁か何か？」

「正解。私はモンタジジイの孫娘にして現魔王エルナ様だ」

えっへんと威張るエルナという子供。

というか、こんな小さい子供が魔王だなんて……大丈夫か？ この世界。

まあ、この世界がおかしいのは今に始まったことじゃないか。

「そつえば、おじいさんは元気？」

「うむ。元気に天に召されたぞ」

「ああ、そうなんだ。良かつ……て、ええっ!？」

良くない、良くない！ 天に召されるって死んでるってことだよ!？ この少女はなんら違和感なくそんな大それた話を話す。

普通しおらしくなるとか、悲しそうな表情するんじゃないの？

「ど、どうして？ 何で死んだの？ 寿命？」

「いやそれがなー、女風呂を覗こうと塀に登っているときにギックリ腰をやったみたいで

そのまま落下。打ち所が悪かったらしく天に召された」

「あ、そうなんだ」

モンタ議長らしいといえばらしいな。

確かにそんな理由で死なれたら悲しみも半分以下だよな……。

「あのジジイのせいで魔王と魔王公平審議の会長もやるハメになったわけよ？」

「……苦労してるね、君も」

「それでなー、魔王の任期も終わっていざ次の魔王決めるときに良い奴が

いないわけ」

「ふーん……」

「そこで思い出したのがジジイの言葉。家で厄介者として扱われてたジジイが、

” おーお、なんと冷たい家族たちじゃ。まるで冬にアイスを食べっているような

冷たさ。昔は良かったのー、鈴木が魔王の頃はこんな事は無かったのにのー”

って耳にタコができるくらい言ってた訳」

……あのジジイ、何かと問題のこしていくな。もう少し冷たく当たっておくべきだったか？

「で、どんな奴か調べたら人間て言うんだからビックリ。まあ、ほ

かに候補

いないからあんたに決まった訳」

「すまん、俺に拒否権は？」

「むっ、人間の分際で拒否とは如何に？ 拒否イコール死の方程式は既に成り立っている」と

知ってての反逆行為だよね？」

人間の基本的人権はこのチビ魔族には通用せず。

どうしてそういう重要なポストを君達はくじ引きとかそういう軽いノリで

決めてしまうのだ？

俺に選択肢は無く、再び魔王としてアリシユレードに君臨することになった。

……不幸の手紙書いておくべきだったかな？

## 第二話 「復活！ 嫌がらせジジイ！」

一年たつて無事平穏な生活が送れると思っていた矢先、突如モンタ議長の

孫娘エルナの陰謀によって再びアリシユレードに招かれた。

俺は以前と同じように強引に魔王にされると、証であるファッションセンスの無い

黒いマントを羽織、金色の腕輪を腕につける。

そして玉座に座ると。

「はぁー……」

思いつきため息をついた。

最初からヤル気などゼロ。以前だって何とかのらりくらりとかわして過ごしていた

というのに。第一、あの時はリーシェが……。

「リーシェ！」

そうだ。以前魔王になったとき、秘書として働いてくれた女性リーシェ。

本名は長すぎてもう覚えてないけど、とても素晴らしい女性だった。それに会って話したい事が沢山ある。

「なあ、エルナちゃん」

「エルナでいい。スズキ」

「あのさ、魔王の秘書で働いていた女性いなかった？ リーシェ…… なんとら」

「ん？ ああ、そういえば居たね」

「何処？ 今何処に？」

「実家に帰ってる。なんかスズキが居なくなってるヤル気無くなったとか言ってた」

その言葉に少し胸が痛む。

ああ……確かにあんな別れ方したらそうなってしまつか。

「呼び出せない？ 会いたいんだけど？」

「うーん、ちょっと難しいよ？ だってそういうヒロインは一人でいって

思うしー」

「？ ヒロイン？ 何の話？」

「まあ出てくるのに後三話ぐらい必要じゃないかなー？ そんな感じが

ビビツとテレパシーで来てるヨ」

うんうんと頷いているエルナ。

一体なんの話だというのだろうか？ まあ、とりあえず呼んでくれるみたいだ。

「他に居なかった？ こう、アホ面のキザ男とか、金髪の子供とかは？」

「ああー、居たなー。もう見るからにボケ役な男と生意気なチビツ子が。」

ボケ役は会社継いでるって話で、チビツ子はやりたい事が沢山あるから旅に出るって」

「そっか……」

皆それぞれやるべき事があるんだな……。そうだな、あれから一

年も

経ってまさか暇とかいう事はないよな。うーん残念。もう一度できれば

ゼロ以外は会いたかったな……。

「あーあ、モンタ議長も死んで会えないもんな」

まあ、もう寿命で死んでもおかしくなかったし、遅かれ早かれ会えない

運命だったかも……。そうしてちよつとだけ悲しみに浸っていると。

「ん？ スズキはあのジジイに会いたいの？」

「えっ？ まあ、少しだけ」

「会えるよ」

「……へっ？」

「でもねー、このまま放っておくのが一番いいと思うけどなー。会っても

何にもいい事無いとおもうよ？」

あからさまに嫌そうにするエルナ。

しかし、本当に会えるのであれば一瞬でも会ってみたい。  
だって死んでるんでしょ？ モンタ議長。

「じゃあ、ほんの一瞬でいいから。その後は強制的に帰してあげて」

俺の言葉にエルナはぶすつと頬を膨らませる。

そして、広間の中央に立つエルナ。

” ジュゲムジュゲムゴコウノスリキレ…… ”

エルナが呪文を唱え始めると足元から円を描く様に青白い炎が立つ。そしてその炎はやがて円の中に五芒星を作り出す。何と本格的な魔法なのだろうか……。

” エーットコノアトナンダッタケ・アツ・ソウダッタ ”

……えっと、今の呪文なの？ 普通の言葉みたいだったけど？  
更にエルナの詠唱は続き、そして最後に。

「出て来い！ 変態ジジイ！」

そうしてエルナが魔法陣に手を当てると、光の柱と共に煙が立ち込める。

そして煙がおさまり、出てきたのは……！

「もう少し、もう少しで女湯が覗け……あれ？ ここはどこじゃ？」

変態ジジイだった。

以前と変わらぬ姿。髪は白く雑草のようにぼうぼうに生えて顔が分からない。

立派なふさふさな髭。腰はほとんど九十度に曲がっているお爺さん。しかしあなどるなかれ、あれは偽りの姿。エロい事になると機敏な動きができる

スーパー変態ジジイなのだ。

唯一変わった所といえば、頭に何やら三角巾を巻いているぐらいだ。

「死んでからも元気そうですね、モンタ議長」

「ムッ？ おおっ！ 本田！ ホンダではないか！」

「あの、鈴木ですから……」



「わかっておるわい。アリシュレードジョークじゃ、ジョーク」

又ハハハと笑うモンタ議長。

あー、元気な事も分かったし、もう帰ってもらおうかな。

「ジジイ、死んでからも女風呂覗いてるのか？ この恥さらし」

「むっ、エルナか？ どうした？ ワシをこんな所に召喚などしおつて。」

あつ、さてはワシに会いたくなつたとかか？ 可愛い奴じゃのー」

「誰がだ、ボケ。スズキが会いたいつていうから召喚しただけ。あんたの顔なんか

家に置いてある写真でも黒く塗りつぶしてる」

「ぬはっ！ 何という孫じゃ！ 育ての親の顔が見てみたいわい！」

感動の再開に二人の怒りは既にMAX寸前。火花が飛び散ってます。よほどエルナはモンタ議長の事が嫌いみたいだな……。

「あー、モンタ議長もう帰っていいですよ」

「おぬしも酷いのう……呼びつけておいてサラリと帰れ発言とは。もう少し年寄りをいたわらんか」

「とは言いますが……」

「スズキ！ このジジイもうあの世に帰していいよね！」

親の仇を見るかのような目で俺に訴えてくるエルナ。

まあ、目的は果たしたし、このままモンタ議長に居られてエルナの機嫌を

損ねてもよくないしな。と言うわけで、俺は気兼ねなくOK、良いよーと笑顔で

GOサインを出す。

「お主！ それはあまりにもあんまりではないか！」

「まあー、これは仕方ないです。さっさとあの世に帰って静かに暮らしてください」

「わ、ワシに何か恨みでもあるのか鈴木！」

「ありすぎて困るぐらいですよ」

エルナが再び呪文を唱え始める。

モンタ議長の足元に魔法陣が浮かび上がり、少しずつ体が魔法陣に飲まれていく。

そうして全てが飲み込まれ、再びあの世にモンタ議長は帰っていった。

「全然変わってなかったな、モンタ議長」

「だから言ったじゃない。会ってもいい事ないよって」

そうしてエルナがフンと顔を背ける。

けれど初めて懐かしい人と出会えてどこかホッとしていた。  
しかし……。

「あれ？」

突如床から魔法陣が浮かび上がる。そして、そこから何故か再びモンタ議長がポーンと投げ出されるかのように飛び出てきた。

モンタ議長は飛び出したときに打ったのか、腰をさすっている。

「ど、どうしたんですかモンタ議長？」

「いや、実はのう、一回向こうに帰ったのじゃが、”もうお前帰ってくるな。”

お前が居るとはた迷惑だからもう一度向こうに行って来い”とあの世の偉い

方がワシを追い出してしまったのじゃよ」

参った、参った。と簡単にそんな事を言うモンタ議長。  
えっと……それってつまり。

「まあ、またよろしくと言う事じゃな。おぬしもワシが帰ってきて  
うれ……

ブルワアアアー！」

顔が歪むほどの二人の正拳突きがモンタ議長に炸裂する。

ああ……俺が召喚したばかりに要らない人材がひとり増えてしま  
った。

### 第三話 「素晴らしきボケ役」

モンタ議長が生き返って一週間が経過する。

相変わらずモンタ議長とエルナは仲が悪い。ちょっと目を離すと殺し合いするぐらい。

しかし、喧嘩するほど仲が良いともいうからアレは一種の愛情表現なんだろう。

うん、そう思っておこう。

俺がアリシュレードの魔王として君臨した事は既に世界に知れ渡っている。

これを聞いてリーシェが来てくれると嬉しいのだけど……。

そんな事を思いつつ、広間にテーブルを置いて三人で朝食を摂っている。

「ん？ 何か下の階がさわがしいよスズキ」

「えっ？」

うーん……言われてみれば。なにやら悲鳴に近い声に、馬の鳴き声に似たような声。地鳴りのような音がどんどん広間に近づいてくる。

「ハーツハハハ！」

「！こ、この声は……」

俺の第六感が告げる。この笑い声の人間にはあってはならない。というよりも、会いたくない。

そんな俺のささやかな願いも虚しく、広間のドアが思いつきり開かれる。

「ひっさしぶりだねー、魔王君。元気だったかい？」

白い馬にまたがり、キザっぽくも馬鹿っぽい男が姿を現す。  
髪は背中の辺りまでありストレートで紫。

頭には小さい角が二本生えており、体はスマート。

体には豪華な金細工を見につけるブルジョアな奴。

俺が一番会いたくなかった奴が姿を現した。

こいつの名前はゼロ。リーシェに片思いをしている魔族だ。

以前も何かと俺に突っかかってくるはた迷惑な男だ。

「えーっと、来てもらった所悪いんだけど、帰って。というより帰れ」

「ハーツハハハ、以前にもましての冷たい言葉。うーん、魔王君が帰って来たと

実感するよ、その言葉」

「スズキー！ 馬が！ 馬が私の朝食を！ コラー！」

「や、やめんか！ 暴れるな！」

ゼロが来ただけでも嫌なのに、更に馬なんか連れてくるなよ。  
馬の被害を受けるエルナとモンタ議長。

「とりあえずその馬片付けてくれ。何かと迷惑」

「OK、悪いね、僕のマイサブレッドがお茶目な事をしてしまっ  
て」

そう言ってゼロは馬を魔法でポンとかき消す。

はてさて、静かな朝食がイキナリのハプニングにより中断されてしまった。

この落とし前はどうつけるのか張本人に聞いてみよう。

「ゼロ、俺達の朝食が全て馬に食われたのだがどうしてくれる？」

「そんな事言われてもねー、ばかぁ、魔族一の金持ち、いわゆるブルジョア？」

そんな朝食一つで四の五の言われても……」

俺はともかく、後ろの二人は鬼のような形相でゼロを見ている。食い物の恨みハラスベカラズ、と目が血走っている。

それを見たゼロも些か命の危険を感じたようで、咳払いをすると。

「そうだね、魔王君が帰ってきた暁にご飯を奢ろう。さて、何がいい？」

「ヤター！ 気前いいぞボケ役！ 私、アリシユレードピッツア五人前！」

「ワシはカニのポテトに、モコモコの唐揚げ、それに酒をつけてくれい」

「あー、俺品物分らないから適当で」

それから出前が届くと広間は宴会のような状態に。

たった四人しか居ないというのに凄いはしゃぎよう。

特に酒の入ったモンタ議長とエルナは肩を組んで

仲の良さをアピールするほど。

やっぱり血筋だな、と少し思っていた。

「なぁ、ゼロ」

「ん？ なんだい魔王君？」

「……あれからリーシェはどうだった？」

「ああー、凄いショックだったよ。ばかぁ彼女を慰めようと

実家にまで尋ねたのだが何故か警察を呼ばれてね。  
どうしてだろうか？」

うーん、と腕を組んで真剣に考えるゼロ。

いや、それ一步間違えればストーリーカー。

そんな会話をしていると、ふと真剣な表情をするゼロ。

「いや、君が帰ってきてくれて良かったよ」

「……どうした？ 何処か頭を打ったのか？」

「いや、そうじゃないんだ。実はね、ほらあの子のせいでちょっとね」

そう言つてゼロはエルナを指差す。

なんだ？ エルナが一体何をしたというのだろうか？

「彼女が前魔王と言う事は知ってるかい？」

「ん？ ああ。そういえばそんな事言つてたな」

「その時はもう、悲惨だったんだよ。彼女、魔王だからつてやりた  
い放題」

ゼロのコップを持つ手が震える。

まるで犯罪者の自白のような感じだ。

「た、例えば？」

「そつだね、例えば……」

「おい！ ボケ役とスズキ！ 何しんみりと話してるのだ！」

片手に酒を持ったエルナが俺達の側に来る。

ものすごく良い笑顔で俺達に話しかける。

「いや、ちよつと大事な用をゼロと話していたんだ」

「そうなのか？ ボケ役？」

「ほかあボケ役って名前じゃないから。ちゃんとゼロって名前が

」

「ボケ役、何か芸を披露しろ」

「へっ？」

ゼロがきよとした表情でエルナの顔を見る。

突然の無茶難題に戸惑いを隠せない状況。

「な、何故だい！？ ほかあそんな話初めて聞いたよ！」

「当たり前だ、今決めたんだから。せーっかくスズキが帰ってきたんだ。」

芸の一つや二つ披露できずにどうしてアリシユレードで

お笑いのトップを狙えるか？」

「ぼ、ほかあそんなの狙ってないから！」

ゼロの必死の言い訳をもとめないエルナ。

エルナってわがままと言うか、話を聞かないというか……。

結局根負けしたゼロは渋々皆の前に立ち芸を披露することに。

モンタ議長とエルナは箸と皿でドンドンパフパフと騒ぎ立てる。

「それでは……それっ！」

そう言つてゼロはハンカチからハトを出したり、何も無いところから棒を

取り出したりと見事な手品を披露する。ゼロの意外な部分を垣間見た。

それを見たエルナは。



「ブブブー、最悪。そんな子供騙しで機嫌をとるなどとは片腹痛いよボケ役。」

芸の何たるかを分かってない」

「ひ、酷い言いようだねエルナ君。例えばどんな事がいいのだい？」  
「うーん、私としては人食い虎にふんどし一丁で立ち向かうぐらいの芸は

見せて欲しかったかな。もしくはドラゴンを素手で殺すとか」

はてさて、それを芸と呼ぶのかどうかはともかく、エルナの奴とんでもない

わがままっぷりだな……。これが前の魔王というのだから恐ろしい。

「よし、それじゃあスズキいつてみようか！」

「えっ！？ お、俺も！？」

「モチロン。魔王として立派な働きを期待しています」

期待も何も、俺に虎と格闘などはできないし、ましてや手品もできないというのに期待をされても……。

とりあえず俺はみんなの前に直立不動で立つ。

皆さっきのゼロと同じように騒ぎ立てる。

えーい、どうにでもなれ！

「えーっ、一発ギャグします。布団がふっ」

「おもしろーい！ さすがスズキだ！」

「えー！ い、いやまだ何も言っていない！ 言っていないから！」

「分かる、私には分かるよスズキ。その単純なギャグの中にぎっしりと詰まる奥深さ。そしてワビ、サビ。」

なんとという素晴らしいギャグ！ そのボケ役とはえらい違いだ」

うんうん、となにやら感動に浸っている様子のエルナ。

いや、ワビサビって意味分かって言ってるエルナ？  
まあ、何はともあれ結果オーライ。

「ほかあ魔王君のギャグがいまいちわかんないけど？」  
「ワシもじゃ。まるで凍死するかのような寒いギャグの  
予感がしたのは気のせいかな？」

二人して首をかしげるゼロとモンタ議長。いや、そのとおりです。

「そうだな。それじゃあエルナの一発芸つてのも見てみたいな」

「ん？ 私の？」

「そうそう。一度お手本を見てみたいよね？　なあみんな」

俺がゼロたちの方に意見を求めようと振り向くとなぜか遠ざかる二人。

そしてマツハの速度で首を横に何回も振る。あれ？　もしかして  
嫌な予感？

「そっかー、そうだな。よし！　ここはスズキの為に一肌脱いで  
あげましょう！」

「あー、ごめん、嘘です。やっぱり遠慮しておきます」

「覆水盆に帰らず。一度吐いた言葉を飲み込むことは不可能なので  
すよスズキ。」

やってあげましょう！」

そうしてエルナは広間の中央に立ち、巨大な魔法陣が浮かび上がる。  
今まで見てきた中でも最高の大きさ。

ゴゴゴ、と城全体が揺れ、なにやら酷く嫌な予感タップリ。

「ち、ちなみにエルナは何をするつもりなの！？」

「そだねー、取りあえずこの世界で一番強い奴召喚して戦うっていう極ありきたりな芸を披露しようかと」

「だからそれ芸違うから！ やめて！ ストップー！」

ピカピカーと妖しく光り輝く魔法陣。

そして迫る死の予感。

そうしてこの世界で一番強い奴が姿を現す

！

#### 第四話 「懐かしきチビツ子？」

エルナの魔法陣が妖しく光り輝き、ついに姿を現すすごい奴。  
ゼロとモンタ議長は城の片隅で念仏を唱える始末。

俺はエルナの召喚をただ呆然と見つめる。  
そして。

「出て来い！ 一番凄い奴！」

そのエルナの言葉を合図に白い煙が辺りを包み込む。  
あまりに凄い煙の量にゴホゴホと咳き込む。  
あたり一面煙の海で数メートル先が見えないほど。

「おい、エルナ！ モンタ議長！ ゼロ！ 何処だ！」

俺は必死に呼びかけるものの何の反応もなし。

そうして煙の中を歩いてしていると突然背中から何かがぶつかってきて  
思いっきり地面に倒れる。

しまった！もしかしてエルナの召喚した奴！？

俺は必死に逃れようとするが何かが上に乗っかっているのかビクと  
もしない。

殺されると思った瞬間。

「むふふー、聞いたことがある声だと思ったらヤッパリ」

「！ そ、その声はもしかして！？」

聞き覚えのある透き通ったような高い声。

俺は背中に乗っかっている人物を見ると、そこにはショートカット  
の金髪の小さな子供が居た。

蒼く輝く瞳。輪郭は丸みをわずかに帯びて幼さを漂わせる。そして、何よりも目を引くひまわりのような笑顔。この子供を俺は知っている。

「ウィル！ 何時の間にここに？」

「えへへー、今さっき」

ニコニコしながら俺の背中から動こうとしない子供。この子の名前はウィル。

以前何かとお世話になった子だ。結構ヤンチャで手を焼くちびっ子。けれどこの子は少し変わった事情があった。

まあ、それはすでに終わって普通の子供になれたはずなのだが……？

「ウィル何処から入ってきたんだ？ 全然気づかなかった」

「んー、実は僕もわかんないんだよ。気づいたら突然この場所に居てね、近くで声がしたから」

来てみるとお兄ちゃんが居たって訳」

と、困ったような様子で話すウィル。

……さてよ、それってつまり。

「あー！ スズキに誰か乗ってる！」

エルナの驚いた声が城内に響き渡る。

周りを見るとすっかり煙は晴れていた。

エルナは俺の上に乗っかっているウィルに指を指す。

「おおっ！ ウィル、ウィルではないか。なつかしいのう」

「あれ？ モンタおじいちゃん？ 確か死んだはずじゃなかったの？」

「ワシにも色々と言があるのじゃよ。まあそこは聞かないでおくれ」

ふう、とため息をつくモンタ議長。

まさかあの世で門前払いされたとは言えないよなー。

ゼロもウィルと会って懐かしそうに話をしていた。

しかし……なぜかエルナの様子がどこかおかしい。

何かこう、嫌そうな感じをかもし出していた。

「エルナはウィルと初めて会うのか？」

「違う。このチビとは以前に面識あるよスズキ」

「むっ、なんか気に食わない声がすると思ったらモンタじいちゃんの孫娘のペチャパイ娘じゃん」

互いにこめかみに青筋を立てながらバチバチと火花を散らす。

竜虎相打つ。

二人からはなにやらオーラのようなものが見えていた。

俺はモンタ議長の隣に駆け寄り、どういう事情なのか聞いてみる。

「あの、二人とも何かあったんですか？ 凄い険悪なんですけど？」

「おお、そういえばあの時おぬしはおらなんだな。ふむ、いいじゃろ、少し長い話をしてやろっ」

そういつてなにやら真剣な顔をして過去の回想を語りだす。

「そう、あれはお主が帰ってエルナが魔王になったときじゃった

」

” 今日から魔王になったエルナだ。皆ヨロシク！”

家臣達はあるな小さい子が魔王になったと聞き、はあー、とため息をついたものじゃ。

あんな子供に責任重大な魔王が出来るのかどうか……。それを見たエルナはと言うとじゃな。

” お前らクビ。出て行け”

などと家臣全てを首にしてしもつてな。

それを見た心優しきウィルがエルナに立ち向かったのじゃよ。

” ちょっと酷すぎだよ。何もそこまで言わなくても”

” うるさいチビ。お前もクビ”

後は地獄じゃった。

あっさりと戦いの火蓋は切って落とされたのじゃよ。

互いに勝るとも劣らぬ魔力を秘めておつてな。二人は三日三晩戦い続けたのじゃ。

あの時はアリシュレードは火の海と化すかと思った。

逃げ惑う人々と魔族。

そして四日目の朝。

” ムカついたー！ 良いよ！ 出て行ってやるもん！ ベー！

僕だって他にやる事いっぱいあるし！ バカバカバーカ！”

ウィルが世界の為を思って自ら身を引いてくれたのじゃ。

そうして世界を巻き込んだ子供の喧嘩は終わったのじゃよめでたし、めでたし……。

「と、いうわけじゃよ」

「分かりました。分かったんですけど、全然めでたくないですよそれ！」

つまり、その犬猿の仲とも取れる二人が感動の再会を果たした。それが意味するもの、それは再び喧嘩が始まる前兆じゃないか！

「わざわざクビになったのに戻ってくるとはいい度胸だなちびっ子」  
「君だつてチビじゃんか。さらにまな板娘」

さらにヒートアップしていく互いの怒り。  
魔王としてここはこの二人を止めなければ！

「う、ウィル落ち着け！ それにエルナも！」

「お兄ちゃんはそういうけど、向こうはヤル気だよ？」

「それはこっちの台詞。スズキが言ってるからやめてあげてもいいよ？ 私も

弱いものイジメは嫌だし」

プチッ、とウィルから何かが切れた音がした。

スマイル全開、ヤル気全開。ウィルはなにやら両手を前に広げ、呪文を唱えだす。

「ぬ、ぬお！ あ、あの呪文は！」

「えっ？ 何かあるんですか？」

「アリシユレードに伝わる禁呪じゃ！ 一度放たれば半径百キロ



は焦土と化し

向こう二十年は生物が住めない破滅の」

「ウィル！ 止めるー！ そんなもん放つんじゃない！ というより、何でそんなものを

唱えようとするんだ！」

「大丈夫だよお兄ちゃん、ちょっとこの生意気娘を懲らしめるだけだから」

「大丈夫じゃない！ 俺たちが大丈夫じゃないから！」

半径百キロが焦土と化す魔法を唱え始めるウィル。

その魔法の強大さを分かっているのか、エルナの顔がこわばる。

エルナもまた、なにやら両手を上に掲げて唱え始める。

「ぬ、ぬほ！ あの呪文は！」

「何ですか？ また禁呪ですか？」

「うむ。巨大な隕石群が空から降り注ぐというあっさりした魔法じゃない。まあ、こればかりは

当たる場所は運任せじゃ。直撃した部分は、まあ、ご臨終という事でOKじゃな？」

「OKできません」

城が二人のちびっ子の魔力で地震が来たみたいに激しくゆれる。

二人から直視出来ない程の光がほとばしる。

「ど、どうにか止める方法ないんですか！ モンタ議長！」

「ぬう、何とかあやつらが立っている下の魔法陣に入り込めれば何とかなるはずじゃが……」

「じゃが？ 何ですか？」

「入った途端、その魔力を浴びてしまうからのう……痛いところじやすまんぞい」

むう、確かに。

ただでさえとんでもない威力の魔法を唱えているのだから、下手すれば死んでしまう。

ん？ 死んでしまう？ まてよ……。

俺はチラリと横にいるご老人を見る。

「むっ？ なんじゃ？ わしの顔に何かついておるか？」

「モンタ議長、すみません。俺たちの為にもう一度死んでください」  
「へっ？ お、おぬし何をかんがえ おわああ！」

モンタ議長が話し終える前に俺はモンタ議長の服を掴み、そのままスローイン。

やはり幽体は軽い。勢い良くエルナとウィルの魔法陣が重なっている部分にスポツと入る。

瞬間。

「ピギヤアアアア！」

あらぬ声をあげ、モンタ議長の体がとても明るく発光する。

どうやら二人のとんでもない魔力がモンタ議長の体を通して流れているようだ。

何分が続いた後、黒焦げになってその場につつぶせに倒れるモンタ議長。

それと同時にウィルとエルナの魔法陣も消えてしまった。

「お兄ちゃん酷い！ なんで邪魔したの！」

「スズキ！ どうして！」

「どうしたもこうしたも無いだろ二人とも！ 二人仲良く！ これが一番！」

これが可愛いチビツ子同士の喧嘩なら放っておくが、死活問題となれば話は別です。

俺は二人に近づき、お互いの手を取り、握手をさせる。  
嫌そうにウィルとエルナはお互いを見つめる。

「お願いだから、二人仲良くね？ 皆の為、俺のために。ね？」

「……分かったよ、お兄ちゃんの為ね」

「……スズキの為にね」

ぶすっ、とする二人。

また厄介な種が一つ増えてしまった。

さてと、何とか二人をなだめる事に成功したし……向こうで黒焦げになっている老人を

どうしようか悩むのであった。

……火葬は無理かな？

## 第五話 「ただいま」

果てさて、実はこの世界はチビツ子二人の機嫌で崩壊するという事実を知った。

ウィルとエルナは相変わらず険悪な仲で、これはどうにかしないといけない。

そして、城の中に何時までも居座るご老人と、ブルジョア魔族もどうすれば

いいか頭を悩ませる種になっている。

以前とは違って、てんてこ舞いの毎日。

異常とも言える重労働によって体はヘトヘト。

ベッドに入るや否や、すぐに寝てしまう。

ああ……こんな時にリーシェが居てくれたら。

「ん……」

朝、外からの異常な音によって目を覚ます。

何か凄まじい騒音が聞こえる。

おもむろにベッドから立ち上がり、窓のカーテンを開けて外を見てみるとそこには

ヘルメットをかぶった敵つい魔族の集団が工事をしていた。

その中心には作業を指示するピンク色の髪をした魔族が。

それが誰なのか言うまでも無いだろう。

とりあえず頭を悩ませながらその現場へと向かう事に。

「おい、エルナー！ なにやってるんだよー！」

騒音の為、大声でエルナに声を掛ける。

どうやら声が届いたらしく、俺の方を振り向くエルナ。すぐさまエルナのほうへと駆け寄る。

「スズキどうした？ 何かあったのか？」

「何かあったじゃないだろ？ これは一体どういう事だよ？」

目の前で行われている珍現象を指差す。

幾ら広大な庭があるとはいえ、勝手に工事などされては困る。

それに工事とは名ばかりで、設置されているのは地雷やらトラバサ

ミなどの

罠トラップの類ばかりだ。

「スズキ、これには川よりも深い訳があるのだ」

「いや、川はそんなに深くないよね？ むしろ浅瀬。で、どんな訳？」

「うむ。それは……私のポジションを守る為だー！」

ピカピカー！ とエルナの背後に落雷が落ちる。

……いかん。なんの事だかさっぱり分からない。

最近のエルナの言動についていけなくなってきた。

「えっと、どういう事なのかな？」

「これだけ言っても分からないのスズキは？ ぶっちゃけ聞くけど、私って

どついうキャラ？」

「……お笑いキャラ？」

あつ、まずい。どうやら今のはエルナの逆鱗に触れたようだ。

ニッコリスマイルで”良い度胸してるね、スズキ。次ソレ言ったら  
クロスからね”的な

視線を瞬時に感じ取った。

俺は気を取り直して心にも無いことを言う。

「ひ、ヒロイン？」

「そう！ それなのスズキ！ 私は唯一無二にして絶対のヒロイン！  
全ての男を骨抜きにするこのラブリーな瞳！ 皆の視線が釘付け  
のナイスバディ！」

そして極めつけが完全無欠のこのビジュアル。私はこの世で一番  
ヒロインに

ふさわしい女性なの！」

自画自賛して自分にうっとりしているエルナ。

……まあ、何だ。聞かなかったことにすれば大した問題ではない。

「それで？ 良く分からないけど、エルナはポジションを守るため  
にこんな大掛かりな

工事をしているわけ？」

「おう。来るべき敵に備えて万全の態勢を整えておかねばならない  
からね。

だからこうしてボケ役の会社従業員を二十四時間態勢で働かせて  
いる。

もちろんボランティアで」

「……ちなみに、ゼロの許可は？」

「問題なし。少し五月蠅かったから裏山に埋めて来た」

サラッと殺人を自供する犯人。

まあ、手遅れかも知れないけど後で助けに行くとして。

「エルナがそこまで危惧する人物って誰？」

「えーっと、リーシェ何たらって人」

「へー、そうなんだ」

リーシェ何たらか……。確かにリーシェならエルナのヒロインの座も危ないかも

……つてええ！？

「り、リーシェ！？　リーシェが来るの？」

普通に聞き流していたけど、リーシェという言葉聞いて驚く。もしリーシェが来るのならこれ以上嬉しいことは無い。

「うむ。おそらく今日当たりくるでしょう」

「それが本当ならパーティの準備を……」

「必要なし！」

クワツ！　と目を見開いて断固拒否するエルナ。

「ど、どうして？」

「いい、スズキ？　あの人 cameたら私の出番なくなっちゃうかもしれないんだよ？」

「いや、別に構わないような気も……」

「ほほう」

ピカー、と目を光らせるエルナ。

それを見た瞬間、背筋に何かゾツとするものが込みあがる。

なんというか、サスペンスドラマで振り返ったら殺人犯が居る状況。つまり、絶対絶命的なものを感じ取る。

すかさず、「やだなー、冗談ですよ、冗談」と、切り替えます。

「私の出番をこれ以上減らされても困るし、あの人には悪いけど、

死んでもらうのが最善かなー、と結論に達したわけで」

「いや、二人仲良くすればいいだけじゃないかな？」

「シャラップ！ そんな仲良しこよしできる訳無いでしょ！ 良  
い？

目の前に食べ物が一つあって半分個なんてことは出来ないんだか  
ら！

この世は所詮弱肉強食の時代です」

どうやら何があってもリーシェを亡き者にしようと考えているエル  
ナ。

しかし、俺としてはソレは何があっても止めて欲しいわけなので。

「わかった、こうすればいいんじゃないかエルナ」

「ん？」

「エルナはヒロインで決定。リーシェはサブキャラで決定。これで  
万事解決じゃないか？」

我ながら良い提案。

これならエルナも文句をいう訳無いだろう……。  
そう、思っていたのだが。

「んなことで解決できるわけないでしょー！ 馬鹿ー！」

あっさり否定されました。おまけにグーパン付き。

「サブで収まるような器だったらこんな事しない！ サブに甘んじ  
つつ、いつの間にか

ヒロインを抜くぐらいの人気が出てるなんて法則は幾らでもある  
んだから！」



それだけ言つとエルナは工事を進める。

工事は着々と進み、ついに完成。

広大な庭は見る影もなくなり、あちらこちらにトラップが見え隠れする。

「よし、これで準備は万端。後は獲物が罠に掛かるのを待つだけ」

エルナはフフリと悪魔のような笑みを浮かべる。

うわー、嬉しそうだなエルナ。

「さてと、腹が減つては戦が出来ないので、お昼にしようよスズキ」

「えっ？ もうそんな時間？」

「うむ。お日様が真上に来てるでしょ？」

天を指差すエルナ。たしかにお日様が真上にきていた。

仕方が無いので俺とエルナは城に戻り、台所へと向かう。

すると、なにやら台所から良い匂いが漂ってくる。

「あれ？ だれか居るのかな？」

台所のほうを覗くと、鼻歌を口ずさみながら誰かが料理を作っていた。

後ろ姿からだど、どうやら女性のようだが？

「あの……」

料理の邪魔になるかもしれないが声を掛けてみる。

すると、その女性は俺の方を振り返る。

女性の姿を見て心底驚く。

エプロン姿で料理をしている女性。煌く黄金の長い髪をなびかせ、

目は慈愛に

満ちたような優しい黒い瞳。

スラッとしたモデル顔負けのスタイルとプロポーション。

彼女もまた俺の顔を見て驚いていた。

「り、リーシェ！？」

「お、王様？」

あまりに意外な出会い方に虚をつかれたような感じだった。  
嬉しさと驚きが重なり硬直する。  
そんな状態の時。

「な、何でここに居るのー！？」

後ろからエルナの叫び声が聞こえ、硬直が解ける。

「どうやってこの城に忍び込んだの！ あなた！」

「どうやってと言われても……普通に入ってきましたけど？」

「嘘だー！ あの完璧な罫包围網を潜り抜けたと言うの！？」

「えっと……もしかして朝の工事の事ですか？ 工事の邪魔をした  
ら悪いと思って

こっそりお城の中に入らせてもらいましたけど」

その言葉にエルナは非常にショックを受けた様子。

ボロボロと涙を流してその場から走り去っていった。

まああれだけやって無駄に終わったというのは辛いものがあるよな。  
そして台所で俺とリーシェの二人つきりになってしまう。

しばらくぶりに見たリーシェはまた一段と綺麗になっているように  
見えた。

けれど最後に別れた時のことが脳裏によぎる。

最初にどう話そうか悩んでいると。

「王様……」

「あ、な、何？」

ドギマギして次の言葉を待つ。

どんな酷い事を言われるかとおもっていたら。

「お帰りなさい」

優しく微笑み、そんな言葉をかけてくれた。

その言葉で今までに無いぐらい実感が湧いた。

ああ、本当に俺はこの世界に戻ってきたんだと。

「……ただいま、リーシェ」

## 第六話 「お掃除しよう」

ついにリーシェが帰ってきてくれた。

感動の再会の後、リーシェにもう一度秘書をやってくれないか頼むと。

「はい。私のほうこそお願いします」

と、快く引き受けてくれた。

こうして前にいたメンバーが全員揃った。……内、二人がいないけど。

城の中にもぎやかになり、仕事のほうもリーシェと分担してこなしていく。

しかし……こうして全員そろつと何時も嫌な事の前触れのような気がしてならない。

そしてその予感的中する。

「ふう」

仕事のほうも一息ついて玉座に座つて一休み。

今は自分で淹れたコーヒーで一息ついていると、目の前の扉が突如開かれる。

「やつほ、元気だったかい魔王君？」

ワルツを踊るようにくると回りながら俺の方へと向かってくるゼロ。

鼻歌なぞ歌っている始末。

そしてキヨロキヨロと周囲を見渡し。

「おや？ リーシエは？」

「リーシエならちよつと遠くに買い物頼んでる。しばらくは帰ってこないぞ」

コーヒーを飲みながら返答する。

ゼロはどうせリーシエに会いに来たのだろう。

それを告げたら帰るかと思いきや、なにやら不気味な笑みを浮かべるゼロ。

「ふむふむ……それは丁度良かった」

「え？」

「魔王君、実は君に相談があるのだが」

ズズツと俺に顔を寄せてくるゼロ。怖い。顔も怖いけど、頼みごとしてくること自体が怖い。

凄まじく嫌な予感がしてならない。

「なんだよ？」

「実は最近リーシエの様子がおかしいんだよ」

「リーシエが？」

「ぼかあたまたま、なにやら挙動不審な動きをしながら部屋の中へ帰っていくリーシエを

目撃してね。何か部屋に隠しているようなんだ」

リーシエが隠し事？ まあ、人には言えない隠し事なんて一つや二つあるだろうに。

「それで？」

「だからね、僕と魔王君の二人でリーシェの部屋を覗いてみないかい？」

「断る。断じてことわる」

確かにリーシェの隠し事は気になるが、それ以前に女性の部屋に勝手に侵入するのはポリシーに反します。

「魔王君、今しか無いんだぞ！？ リーシェが帰ってくる前に、彼女の秘密がどんなものか

知っておく義務はあるんじゃないのか？」

「ない。そんな義務は全く無い。べつに俺はリーシェを信じてるから良いよ」

「……ほう？ では他の男と付き合っても君は放って置くത്？」

「よし、今すぐ行こう。俺はリーシェを信じているが、隠し事は無いようにしないと」

「さすが魔王君！ 話が分かるね！」

そんなこんなでゼロの口車に乗せられてリーシェの部屋へと向かう事に。

廊下を歩き、リーシェの部屋の前に来る。

リーシェの部屋の前には可愛い熊のマスコットが表札を持っており、そこには

『リーしえるとるーど・ぱとりおっと・でいす・ぱーる・でもんとあるもーでいす』

の部屋とフルネームで書かれていた。

そしてそこで一番目を惹くものは、さりげなく、本当にさりげなく名前の下に。

『のぞいたら殺しちゃうぞ？』と可愛い丸文字で書かれてあった。

きやー、可愛いらしい文字とのギャップが激しすぎて、今すぐその場から逃げ出したい  
衝動に駆られております。

「ゼロ、絶対まずいぞこの展開」

「何言ってるんだい魔王君。ここまで来たら引き下がれないだろ？  
それに、大丈夫

手段を考えてあるから」

はい、と俺になにやら水色のツナギを渡してくるゼロ。  
いそいそと服の上からそれを着ている。

「なんだこれは？」

「いいかい魔王君、僕たちは今からリーシェの部屋を掃除に来たんだ。だから決して

のぞきなんかじゃない。分かるかい？」

「あつ、成る程。清掃員の姿をして侵入すれば……」

無理です。絶対この戦法は通じない。

見つけた瞬間、肉ミンチは間違いないかと。

しかし、念のためいそいそと俺も着替える。

そして二人揃って清掃員の格好をしてリーシェの部屋の前に立つ。

「リーシェ、掃除しに来たよー。居ないのだったら勝手に入るよー」

「いや、勝手に入るなよゼロ。おかしいだろそれ」

ゼロは片手で軽くノックしていると同時に、もう片方の手でピッキングを駆使するというなんとも器用な行動をしていた。  
そして鍵のかかったリーシェの部屋があっさりと開く。

こいつ、今度から出入り禁止だな。

とりあえず用を早く済ませようと中へと忍び込む。

中に入ると、部屋はピンク色で調和されており、可愛い熊のぬいぐるみや、

小物がおいてあった。

実に女の子といわんばかりの部屋の中。中は俺たちが掃除するまでもなく

綺麗にされてあった。

「さてと、見た感じ何もなさそうだけど？」

「魔王君、そんな秘密をあっさり目の見える所においておくわけ無いだろ？」

さっ、早く帰ってくる前に捜してしまおう」

「……つかぬ事を聞くが、何故お前は入ってきた瞬間にリーシェの洋服タンスを調べている？」

「何故って……一番重要だからさ。ぬぬっ！？ こんな派手な下着をリーシェが……！？」

下着を手に取りウォー、と叫ぶゼロ。

コイツ絶対出入り禁止。むしろ世のためを思って今の内に亡き者にすべきか？

「真面目にやれゼロ！ リーシェに見つかったらあの世に行くんだぞ！？」

それからベッドの下、机の上などありとあらゆる場所を探すものの何も見つからない。

というよりも、隠すスペースが見当たらない。

こんな狭い部屋の中で何を隠すというのだ？

「ゼロ何も無いぞ？」



「おかしいね……彼女の態度からして必ず何かがあると思うのだが」

ふう、とため息をつく。

探し回って疲れたため、近くにある壁にもたれかかる。と、その時。

「おわっ!？」

突然壁が回転する。

そのまま後ろに倒れる俺。

何とそこには隠し階段が存在していたのだ。

「こ、これは……」

「魔王君お手柄だね！　きつとこの先にリーシェの秘密があるに違いないよ！」

突如現れ謎の降りる螺旋階段。

俺とゼロはその階段を一步一步慎重に下りていく。

中は暗く、壁はレンガでしっかりと出来ており、かなり丈夫につくられていた。

そしてどんどん下へ下へと降りていくと、光が見える。

階段を降りきった所には大きな扉があり、中から光が漏れていた。

俺とゼロはその扉に手を当てて。

「じゃあいくぞゼロ！」

「オッケー！　うおおおりゃあ！」

ギギツと軋む音を立てながら扉は少しずつ開いていく。

そして、俺たちの目の前に現れた光景は　。

「……え？」

二人揃ってハモツてしまう。

それもそのはず。俺たちの目の前に姿を現したのはガラクタの山。ぶら下がり健康器、飲んだら痩せると書かれた薬。どれもどこかで見たことがあるものだ。

俺とゼロは目の前にあるガラクタの山に足を踏み入れる。

「これは一体……ん？」

ガラクタの山の横に山積みになっているダンボールの山。それを一つ手に取り

まじまじと眺めると、そこにはアリシユレード通販、と伝票がうつてあった。

つまり、このガラクタの山は全て……。

「リーシェが買った通販の山！？」

「成る程。そういえばリーシェは昼のショッピングを最近熱心に見てたね」

「はあ、そういう事か。しかし、よくこれだけ買い物したな……」

リーシェの本当の姿を一部かいま見たような気がする。

さて、分かったら長居は無用だな。

俺とゼロは踵を返して元来た道を帰ろうと　　あら？　目の錯覚でしょうか？

目の前にリーシェの姿が……って、ええ！？

リーシェはとても良いスマイルを見せながら俺とゼロの退路を塞いでいました。

「どうしたんですか？　王様、それにゼロ？」

「はわわわあ！　り、リーシェこ、これはその……」

「ぼ、ぼかあ、そう清掃！ 清掃に来たんだよ！ 魔王君と二人でんな言い訳通用するか！ と心で突っ込む俺。

「あら、そうだったんですか？」

……あれ？ 意外にもリーシェは深く追求せず俺たちの言い訳を鵜呑みにする。

もしかして、通用した！？

「そ、そうなんだリーシェ！ 俺たちは掃除しに来たんだ」

「成る程、分かりました」

なんとこの僥倖！ まさか本当に通用するとは！  
ゼロの考えもたまには役に立つのだな。

「二人じゃつらいでしょう。私も手伝いますね」

「えっ？ だ、大丈夫だよリーシェ。俺とゼロの二人で何とかなるから」

「いえいえ、そういう訳には行きませんよ。だって”大きなゴミ”が”二つ”

”私の目の前に存在していますから”」

こめかみに青筋を立てながらニコリと笑うリーシェ。

ところで、所々強調している部分があるのは何故ですか？

「さてと、どう掃除すればいいか迷いますよねー？ 王様？ それにゼロ？」

指をバキバキ鳴らしながら俺たちを見つめるリーシェ。

わーい、やる気満々ですねリーシェさん。どこから手をつけるのかはあえて聞かないほうが良いのでしょうか？

「あの、とりあえずごめんなさい」

脊髄反射的に二人揃ってその場で土下座。

そして恐る恐るリーシェの顔を見ると先ほどと変わらぬ良い笑顔だった。

「さてと、準備はいいですか王様、それにゼロ？」

「な、何のですか？」

「あの世に旅立つ準備です」

「イヤー！」

叫び声と共に大の男二人が宙を舞う。  
だから嫌だって言ったんだよー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7003d/>

---

なるようになれ\*ミラクル\*

2010年10月11日17時04分発行